



第9弾

ありがたい姿 探検記



前回のおさらい

トピック：SDGs目標3

「すべての人に健康と福祉を」

- ・コロナ禍により健康増進の意識が上がり、課題も多く明らかに
- ・健康であるための大前提で、住んでいる環境を守る
- ・健康、教育、平和、ジェンダー、全てが繋がっている
- ・医療面での選択肢を持つためには経済の発展も欠かせない

先月号は、健康増進に焦点を当て、下川、日本、世界をみてきました。今月から2か月間、アイスキャンドルによるまちづくりの焦点を当てます。

今月の先生（ゲスト）

牧村 洋さん

「ロンブスの卵」メンバー



議論が湧いて、楽しい遊び場が下川町に生まれました。先生、ありがとうございます。

起爆剤としてのまちづくり

当時の社会背景として、約40年前は鉱山の閉山や林業の廃止も目前で、町全体にネガティブな空気が漂っていたと振り返る牧村さん。そんな暗い時だったからこそ、「町に住む自分は何をしたらよいのか？町を盛り上げたい！」と強く思った牧村さんは、まちおこしの起爆剤になるかと決意したそうです。

アイデアで下川を全国に

町をひとつの商品と考へ、下川町を日本中に知らしめようと発足したのが、「ロンブスの卵」の始まりです。彼らが目指したのはまちづくりではなく、「まちおこし」。できることから始めようと、町のPRに「二つ折り名刺」の作成、観光農園「らくがき南瓜」の開園など、独自の活動を行いました。

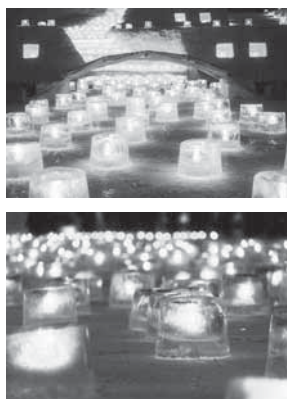
「しほれ」へのこだわり

活動を行う中で、下川町ならではの「しほれ、寒さ」という要素に強くこだわるようになり「アイスキャンドル」です。始まりは一冊の本からで、北欧の幼稚園でつくっていた氷のラン

プシェードを実験的につくってみようと安原公園に30個、自宅にも飾りました。飾ってみたらず想以上に幻想的で、NHKにも取り上げられたことで協力者が増え、定着していったと嬉しそうに語る牧村さん。このように楽しい！きれい！という前向きな感情で始まり、アイスキャンドルはお祭りへ、北海道の冬の風物詩、アイスキャンドルフェスティバルになりました。



コモレビなど町内各所で小冊子を無料配布中



アイスキャンドルミュージアムへ

町全体を博物館のように魅せて、下川町ならではの要素をたくさん見つけていきたいという想いから、アイスキャンドルフェスティバルを命名し直しました。これこそが、寒さに特化した「アイスキャンドルミュージアム」です。

アイスキャンドルを通して

下川町を盛り上げるために活動してきた牧村さんに、まちづくりの想いを聞きました。「まずは自分が楽しむことから始まる」と、笑顔で答えてくれました。「自分が主人公で、住みたい町を自らつくっていくという気持ちで取り組むことが大事」とのことです。その中で、自分が気づかなかった自分が見えてくるでしょう。そのため、アイスキャンドルの継承は、まちおこしを次世代へと引き継ぐことでもあるかもしれませぬ。

今月は、アイスキャンドルによるまちおこしをテーマに牧村さんの取り組みや考え方を紹介しました。幻想的で、想いの詰まったアイスキャンドル。しほれる中、下川の人の温かさをお裾分けする下川の風物詩で、今年の冬は楽しみましょう。後編では、牧村さんの視点をもとに、町、国、世界のまちづくりの進捗を見ていきます。



充実版は公式noteへ



アイスキャンドルミュージアム情報